

和牛輸出拡大へ努力

首都圏MP輸出推進協

首都圏ミートパッカー輸出推進協議会（代表理事＝阿部昌史・MPミート・コンパニオン社長）はこのほど、東京都立川市のミートコンパニオン本社で第5回定期総会を開いた。平成28年度事業報告や29年度事業計画を審議し、すべて原案どおり承認した。

また、役員選任では阿部代表理事以下、原田知昌氏、桜井和巳氏の両副代表理事、阿部徳次、森島了、宮健一、小堀正展、河上貴一、本田一郎、宮下義史の7理事、植井敏夫会計監査役が再任された。

同協議会では28年度、フィリピンでの日本産和牛のカットや活用方法に関するセミナーを開催した。総会のあいさつで阿部代表理事は「当協議会が推進してきた牛肉の輸出の今後について、大きな変化とチャンスが混在する年になる」と述べた。

また、役員選任では阿部代表理事以下、原田知昌氏、桜井和巳氏の両副代表理事、阿部徳次、森島了、宮健一、小堀正展、河上貴一、本田一郎、宮下義史の7理事、植井敏夫会計監査役が再任された。



総会出席メンバーで記念撮影を行った

「まず変化としては、正式に米国がTPPから離脱したことで日米は2国間交渉へかじを切る」とが確実視されている。米国の要求はこれから明らかになっていくと思うが、今後は日本産牛肉の生産量減少に伴う価格高騰、輸入牛肉の他国との競争激化など、食肉を取り巻く環境は厳しさをさらに増していることが予想される。

「一方、チャンスとしては、いよいよ台湾への輸出解禁が目前に迫ってきている。アジア地域で香港やシンガポール、タイへの輸出は堅調に増加しているが、いまや成熟した市場となっている。台湾では、日本産牛肉の輸入に大きな関心を寄せていることから、潜在的に大きな需要を見込める新興市場であると考えられている」

「この大きな変化とチャンスで輸出推進を図るためには、会員の皆さまの応援と協力のもと、日本産牛肉のブランド価値を高めていくような活動が引き続き必要になってくる。今年度も、国の支援事業である輸出促進事業に参画することができた」

「当協議会としてはこのような制度を積極的に利用し、さらなる輸出活性化を推進できるよう努力していくとともに、日本産牛肉の輸出についての情報発信の中心になるようまい進していく」と決意を新たにされた。

新ロゴマークを披露

日本畜産物輸出促進協 香港で和牛ゼミ

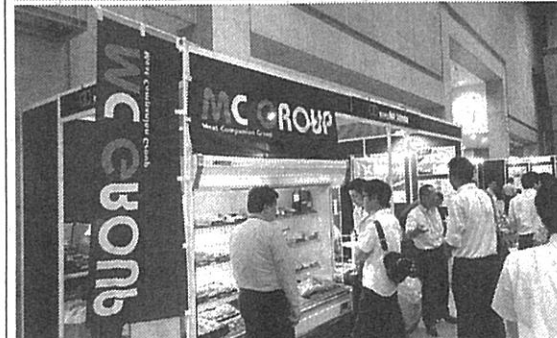
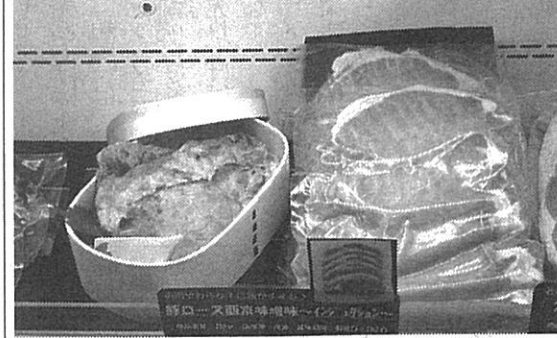
日本畜産物輸出促進協議会はこのほど、和牛の新しいロゴマークの紹介とPRを行う「香港における現地マスコミを活用した和牛PRセミナー」を香港のニューワールドミレニアムホテルで開催した。新ロゴマークには大きく「JAPAN」とうたわれ、他国産との差別化を狙って日本産をよりアピールしており、従来の物と併用して使用される。

海外で新ロゴマークが紹介されるのは初めて。同セミナーは香港の現地マスコミに向け、わが国の和牛認知度向上、他国産和牛との差別化、輸出拡大に向けた推進を図ることを目的として行われ、総勢120人が集まった。

簡便商品などを提案

ミートコンパニオンが

「豚ロース西京味噌味」の調理加工を簡便化する「MC」は8月29日、東京ビッグサイトで開催された「居酒屋産業展2017」に出展。外食業界では最大の悩みともいわれる人手不足対策として、バックヤードで



④「豚ロース西京味噌味」 ⑤試食を含めてさまざまな商品を提案した



行った。また、試食提供は大変興味をもって聞いていた。試食はステーキと「匠の会」シリーズなどを合わせて提案した。肉では、「TOKYO X」を使用した加工品を訴求。ウチ肉を粗びきにして、桜のチップでスモークした「粗びきウチ肉」や、大摩B級グールメ大会で初代ゴールディングランプリを獲得した「肉うどん」、昔ながらの乾塩製法で肉のおいしさを引き出した「乾塩ベーク」などを提案した。

また、北海道十勝の工ルバソ豚牧場で生まれ、広大な大地でのびのび育てられた「どろぶた」を紹介。「どろぶた」は放牧によりストレスを減らし、木の葉や自然の土に含まれるミネラルなどの栄養分を摂取しながら通常の放牧豚より2カ月ほど長い8カ月飼育する。自然の中を自由に動き回ってオレイン酸を豊富に含むどんぐりや草の根を食べることで大きく成長し、オレイン酸は45%以上一般的な豚に比べて高い数値を維持。同社では今後、「TOKYO X」に次ぐ新たなブランド豚肉として展開していきたいと考えた。

月刊 専門誌 MEAT JOURNAL

年間購読料 本体価格 21,000円(送料込み)+税

「豚ロース西京味噌味」(インジェクション加工)は、西京味噌ととも豚肉を漬け込み、軟らかく仕上げた一品。インジェクション加工で原料に直接注入するたため、味の浸透が早く漬